

第7回の議論 意見のポイント

(これまでの検討内容の整理)

- 地域包括支援センターは、高齢者のためだけのもの。近寄るにはいろいろな壁が乗り越える必要がある。その仕組みを区市町村がバックアップできるかがかぎ。
- 居場所づくりとして、「ふらっとハウス」や「地域サロン」のような、地域のたまり場は非常に重要。
- 居場所をつくっていくとき、民家を活用できるような仕掛けが制度的にできないか。例えば、自分の家を拠点として提供したいと考えたとき、税制上のバックアップがあるかどうかで全然違ってくる。

(気運の醸成について)

- シンポジウムは1部で著名人に基調講演をお願いし、2部はパネルディスカッションで実践事例について具体的に話す形式が良い。
- 特に団塊世代の男性は、「地縁」「血縁」という言葉に拒否反応を示す。シンポジウムの基調講演は、聴いた人が従来の枠組だけでなく、活躍できる場が多種多様にあることをイメージできるような内容が望ましい。
- パネルディスカッションでは、団塊の世代が培った能力や技術を地域は待っており、その力を地域で活かし、即戦力として活躍できるのだといったメッセージをぜひ入れて欲しい。

- 地域活動に参加した男性は、その活動を通じて感じた思いを非常に素直におっしゃるので、そのような体験をした男性にパネリストになってほしい。
- シンポジウムも最終報告書も、実践報告を入れることが興味をもってもらうためには必要。
- 読み手の年齢を考慮して、最終報告書は、なるべく片仮名を使わずに作成した方がよい。

(企業とのパートナーシップ)

- 八王子市では、市民活動支援センターに企業から職員が派遣されていたり、NPO法人の活動に多数の企業が参加したりといったように、市と企業・団体の協力体制が出来ている。
- これまでの定年前講習は、厚生年金についての話だけで、退職後の自分たちに今度どんな活躍の場が待っているのか案内がなかった。今後は企業と連携し、セカンドライフをどう過ごすか、培った知識や能力を活かして地域にどんな貢献ができるのかを知ってもらう必要がある。
- 企業のOB会は、バラバラの地域に住む人の集まりではあるが、地域活動の情報を流すことで、自分の地域に目を向けるきっかけにもらえる場合もある。
- ホームページを利用して先駆的な企業の取組や、企業で培った知識・能力等を地域が求めていることを広く発信することで、企業側も新しい協働のアイデアが出てくる。